仕事＝作品としての生[1)]

――リクールとアレントの行為理論・物語理論――

堀　江　宗　正

Life as Work (œuvre) : Theory of Action and Narrative in Ricœur and Arendt

Language and social action are connected in contemporary social theories after the so-called "linguistic turn." The dichotomy between subject and structure is bridged by the concepts of medium such as language games, speech act, communicative act, discourse and so on.

In this article, I shall attempt a reflection on the theory of narrative and action by Ricœur and Arendt. First, the outlines of their theories shall be described. Then Ricœur's concepts of *œuvre* and *action* are compared with Arendt's concepts of work and action. It is certain that the small gap between the two theorists should not be neglected, but Ricœur's framework is more comprehensive than Arendt's. In the latter, a clear distinction is made between work and action. Because of this schism, she had to appeal to narrative on the level of action, although narrative can be seen as a kind of work. On the other hand, work and action are in circular relationships from the beginning in Ricœur's thought. His conception of social action as text, a kind of work, could give birth to the theory of narrative as *mimesis* of action.

However, one cannot dismiss Arendt's contribution to Ricœur's philosophy. Only in the light of Arendt's argument can the political implication of narrative be recognized. Especially, what is important is that, according to Arendt, the demise of public sphere and narrative action in modernity leads to the loss of the uniqueness of one's person. This would make clear the historical significance of the narrative theory in recent years.

はじめに

社会的行為と言語的活動とを結びつける社会理論ないし哲学的考察は，数え上げるときりがない。ウィトゲンシュタインの言語ゲーム，オースティンやサールらの言語行為，ハーバーマスのコミュニケーション行為，フーコーの権力論とディスクール概念などなど。二十世紀を通じて展開されて来たこれらの諸理論は，社会的行為を言語的活動として，あるいは言語的活動を社会的行為としてとらえ返すことによって，社会学の分野ではおなじみの「個人／社会」問題——個人が先か，社会が先か——を無効化しようとする。つまり，そこでは，行為主体も制度もおしなべて，書き込み書き込まれる媒体としてとらえられる。能動的でもあれば受動的でもある証しする身体として，主体かつ客体であるような媒介者としてとらえられているのである。実体としての「社会」や「構造」もなければ，実体としての「個人」すらない。ただ，構造化の作用が仮説的に前提され，そしてそれを示すような媒体——テクストや痕跡や物語——に焦点があてられる。

だが，ここで，先に掲げたようなそれぞれ個性ある諸学説を包括的に論じつくそうとは思わないし，また論じつくせるとも思わない。そのような課題は，「言語派」社会理論のアジェンダの上位を占めるようなものであり（一つの試みとしてcf. Giddens 1976），筆者も長期的にはこの課題に取り組んでゆくつもりであるが，ここではそのほんの一端として，リクールの「テクストとしての行為」論および物語理論と，アレントの「労働／仕事／活動」論をとりあげる。

後期リクールにおいて，アレントの影響は著しい。とくにリクールの物語理論は，直接的にはアリストテレスから議論を起こしているものの，アレントの「活動」のカテゴリーにおける〝物語を通じての行為者の暴露〟

という発想からも大きな示唆を受けているように思われる。しかし，両者のあいだには微妙な差異もある。ここでは，リクールの「行為 action」概念とアレントの「活動 action」概念とを重ね合わせ，リクールの「作品 œuvre」概念とアレントの「仕事 work」概念とを重ね合わせ，そこに生じる緊張がどのような経緯によるものなのかを見届けることによって両者を包摂し，そこから，生を物語あるいは物語る行為そのものとしてとらえるような展望を示したい。そして，最後にアレントの問題意識に立ち戻りつつ，この私的な展望を，近現代社会における労働と仕事と物語を考えるための手がかりとしたい。

1　リクールの「テクストとしての行為」論

P・リクール Ricœur は，「テクストというモデル——意味ある行為をテクストとして考える」(1971)，「ディスクールと行為における想像力」(1976) など，おもに中期の論考において，社会的行為をM・ウェーバーにならって「意味づけられた行動 sinnhaft orientiertes Verhalten」とし，それをある種の「テクスト」としてとらえることができるとする。

行為が〝意味ある行為〟として理解可能になるためには，①それが痕跡を残し，定着することによって外在化しなければならない。②それによって，行為の意味は，もとの出来事や行為主体から遊離する（脱文脈化）。そして，行為の痕跡の総体は，「筋書きを知らない役者によって演じられる劇」とも言える自律的実体としての歴史，広い意味での制度を形成する[2)]。ここでは行為とその意味は客観化され，「脱心理化」される。そこで，社会科学の対象は，「規則によって支配された行動」（P・ウィンチ）であるとも言われるのだが，しかしながらその場合の規則は，〝個人をア・プリオリに規定している構造〟のようなものなどではなく，沈殿し制度化された行為の所産（作品）のなかから分節化されてくるようなものである。③こうして行為はある種の客観性を帯び，持続的なレリヴァンス（行為選択を

導くような有意性)，あるいは時間を超えて偏在するレリヴァンスを有するようになる。そして，ちょうどテクストがいったん自律したテクストとして成立すると新しい指示対象を展開し，新しい世界を構成するのと同じように，行為もまた，存在論的次元としての世界を形成する。④以上のような性格をもつ社会的行為は，可能的な「読者」に差し向けられ，意味が宙づりのままになっている「開かれた作品」として特徴づけられる。それは，プラクシス（行為の長期的連鎖，行為の上位単位）を通じての実践的解釈に開かれ，それによって意味が決定されるのを待っている。

こうして，社会的行為は，社会的時間に書き込まれ，評価され，制度として沈殿し，世界を形成し，再我有化に開かれているわけだが，その具体的な書き込みの媒体としては，物語という形式が考えられる。物語とはすなわち，行為の再記述（記述による現実の再編）であり，筋立てによる行為のミメーシスである。それは，行為の単なる模倣ではなく，想像的変更をほどこし，さらに企図・動機・行動力の各レベルにわたって行為を方向づけてゆく。また，相互主観性の次元を確保し，歴史的経験一般の可能性の条件として，社会的イメージ体を構成し，伝統を媒介する。こうした主張は，リクール後期の物語理論へと発展させられ（『時間と物語』1983-5），行為し受苦する自己，証しする身体の存在論として結実する（『他者のような／としての自己自身』1990 a)。そこでは行為のみならず人間の生そのものが，テクスト，開かれた作品としてとらえられてゆくだろう（「生――語り手を探求する物語」1986)。

2　アレントの「労働―仕事―活動」論

人間は，自らが関わろうとするものによって規定される。このような発想はH・アレント Arendt の『人間の条件』(1958) をも貫くものであった。そこにおいてアレントは，「労働 labour」「仕事 work」「活動 action」という三つの基本的な人間の活動様態 activity を取り上げる。

古代ギリシアの政治思想においては，活動を上位とし，仕事，労働が順次したがうようなヒエラルヒーが構成されていた。アレントはこのヒエラルヒーを一つの範型とし，それが近代へと進むにつれてどのようにねじれてゆくのかを描き出し，そしてそれを通じて近代大衆社会の特質を明らかにしようとした。

細かく見てゆくと，「労働」とは，自然の生命過程のなかで生み出され消費される必要物によって拘束された活動様態で，何かを生み出すものの，その所産は恒久性を持たず，消費されればあとには何も残らない。それに対して，「仕事」は，個々の生命を超えて永続するような「物」を作り出し，それによって人間が安住する世界を形成する。「活動」は，多数性という「人間の条件」のもと，自然や物を介さずに人間と人間とのあいだでおこなわれる活動様態であり，あらゆる政治的生活の条件である。そこでは言論，とりわけ物語を通じて活動者の唯一存在としての人格的アイデンティティたる「誰」が開示される。リクールの物語理論も，アレントの活動 action のカテゴリーで論じられる「関係の網の目において演じられる物語」という発想から影響を受けている。

3　リクールとアレント

次に，アレントとリクールの立論の共通点と相違点を見てゆきたい。ここではまず微妙な相違点が目立つ。とりわけ，リクールの物語概念は，アレントの枠組では「仕事 work」にあたるのか「活動 action」にあたるのか，という問題がある。というのも，アレントが依拠する古代ギリシアの範型のなかでは，決定的・排他的ではないにせよ「活動」が痕跡の制作たる「仕事」よりも上位に来るからである。

活動様態のヒエラルヒーの組み替え

ところで，アレントは，古代ギリシア人の政治理解に全面的に賛成して

おり，労働や仕事よりも活動のほうが人間本来の自由な存在様態であると考えていたのであろうか。それは，たしかに分かりやすい，そして一般的なアレント理解のあり方ではある。しかし，『人間の条件』という複雑な書物の読みとしては粗雑すぎる。この粗雑な理解の前提にあるのは，労働と仕事と活動はそれぞれまったく別個の独立した活動様態であり，活動に比して他の二つは人間にとって非本来的なものだという考えである。しかしながら，労働につきまとう生命の必然性も，仕事につきまとう対象への暴力性も，人間にとって避けられないものであり，それ自体としては否定されえないものである。他方，活動も，それだけで諸手を上げて称揚されているわけではない。それは「はかなさ」と「不可逆性」と「予言不可能性」という弱さを持っており，物語と許しと約束という手だてによって，かろうじて不完全ながらも救済されるようなものなのである。とりわけ，そのはかなさという質は，物語の制作とポリスの創設によって贖われねばならなかった。ここに，活動が仕事の力を借りることなしには成立しえないという事態が看取されねばならない。さらに，古代ギリシアにおける奴隷制の問題が残る。アレント自身，当然のことながら奴隷制を容認しているわけではない。活動は自由な市民にのみ許される特権であるが，それは何よりも奴隷の労働なしには成り立たない消極的自由の享受なのである。

同じように粗雑だと思われるのは，〝古代ギリシアの「活動―仕事―労働」のヒエラルヒーが，全体主義にもつながりうる近代大衆社会の「労働―仕事―活動」のヒエラルヒーに転倒したのだから，それをさらに転倒させて「活動」を復権させればよい〟というようなある種ノスタルジックなアレント理解である。三つの活動様態が決定的に排他的なものではないという先ほどのような観点に立つのであれば，どれを優先させればよいかということが問題なのではない。むしろ，その内のどれか一つが単独で優位になるような事態こそが，問題視されねばならない。活動の優位は奴隷制を前提としていた。仕事の優位は，目的と手段の道具的連関の遍満を帰結し，そこには暴力性がつきまとう。そして，労働の優位は，労働者の解放

ではなく労働力の解放をもたらし，多数性を構成するはずの唯一無二の個々の人間たちを単一の生命過程のリズム，一つの機械・機構のリズムに吸収し（全体主義の招来），公的領域の喪失をもたらした。いずれも一つの活動様態の排他的優位がもたらした帰結である。したがって，近代における労働の優位を単純に転倒させるよりも，それぞれの活動様態が適切な相互作用のもとに展開されるよう配慮し続けることが重要であり，それによって三つの活動様態の覇権争いに終止符を打つことが戦略的に目指されねばならない。

しかしながら，アレントにおいて以上のような戦略が明確に主張されているわけではない。『人間の条件』という書物は，そのような解答を提示せず，三者の複雑なやり取りをなぞりながら，われわれに熟考を迫るのである。

リクールのアレント論

ここで注目すべきは，リクールのアレント理解である。リクールはアレントの「労働」「仕事」「活動」概念を，人間の時間性との関わりの様態としてとらえる。つまり，労働はもっとも短い周期で生起・循環する生命過程の営みであり，仕事は自然の生命過程や個人の生のスパンをも超えて永続する物と世界の制作に関わる。活動は，たしかに「はかなさ」という特質につきまとわれるが，個々の人間を登場人物とするものの，その意図によって制御されない歴史の形成に関わるものである。生命，世界，歴史と，時間性のスパンは拡大してゆく。ここに更なる上位理念として，永遠なるものに関わろうとする観照を置くことさえできるだろう。これは，観照を考察の外に置いた『人間の条件』を超えて，晩年の『精神の生活』にまでつながるような一つの透徹したアレント理解になりうる。

しかし，それは同時に巧妙なかたちで，リクールの文脈への置き換えを含んでいる。もちろん，アレントにおいて，活動と物語と歴史のつながりは明示されているのだが，上のような枠組に置かれると，活動が「制作」

という行為を抜きにしては成り立ちえないということが際立ってくる。それは単に，活動の痕跡が歴史の制作につながるという一方向的なものではあり得ない。「活動＝行為」(action) は，すでに物語によって媒介され，構造化されているという，先に紹介したリクールの「テクストとしての行為」論と接続されうるからである。“action” は，物語によって模倣されるばかりでなく，物語を「上演（アクト）」することでもあるのだ。そして，このような演劇的メタファーは，アレントによっても共有されているので，決して強引な理解とは言えない。

こうして，人間事象に留まってさえいれば――つまり永遠の次元に足を踏み入れさえしなければ――「仕事 work＝作品 œuvre」概念は人間の生を構造化する媒体として，排他的ではないにせよ根底的な位置を占めるようになる。「労働」もそれが真に人間的な労働になろうとするならば，自然だけでなく世界の制作という「仕事」に連ならねばならない。そして，「活動」は，仕事の所産である世界という舞台で行われ，それによる規制を受けながら，物語作品の製作という仕事を通じて開示され，記憶され，語り継がれてゆくのである。

エクリチュールとしての活動

アレントが仕事のこのような枢要的地位を明確に理論化しえなかったのは，彼女が拠って立っていたモデルが，ロゴス中心主義的な〈文字の文化〉にまさに移行せんとするリミットに踏みとどまっていた古代ギリシアに由来していたからであろう。

プラトンは，エクリチュールという「パルマコン」(薬＝毒) を拒絶し，パロールの価値を称揚しておきながら，他方では，イデア論を提示するときに職人の制作の経験の例示に訴え，その政治哲学を，哲人王の支配するポリスの制作として提示し，のちの西洋の政治思想を政体の建築術として方向づけている。一方でエクリチュールを貶め，他方ではそれに依拠する。エクリチュールへのこのようなアンビヴァレンツから，以後，ロゴスの支

配のためにエクリチュールを最大限に利用しつくすロゴス中心主義が胚胎するであろう[3)]。

プラトン以前のギリシアの政治的経験に根差していたアレントの「活動」は，文字以前の〈声の文化〉における政治的言論の性格を濃厚に残している。しかし，そのはかなさ，不可逆性，予言不可能性という質は，〈声〉の質ではない。〈声〉はむしろ発されるたびに，強固な同一性を主張し，はかなさや不可逆性や予言不可能性を否認し，抹消しようとするのである。声によって否認されるこの質は，実のところ，他に差し向けられ，無限に生成し，散種するエクリチュールの質そのものである。パロールのなかにも原(アルシ)エクリチュールが潜んでいるということを言いたいのではない。むしろ，みずからの限界を自覚する活動は，言論優位の外面をまとった真正のエクリチュールではないか，ということである。アレントは痕跡の製作に関わるものをおしなべて仕事のカテゴリーに押し込んだために，活動をも貫く仕事の基礎的地位を十分認識できなかったのである。

いずれにせよ，上のような見地からすれば，アレントが西洋の政治思想史のなかから発掘しようとしているのは，「一つの声」に支配されることのないエクリチュールの展開によって立ち現れる「多声の世界」であり，それを是とする〈公共性の伝統〉である。このいまだ生きられざる伝統は，すでに生きられている支配的伝統に対抗するものとして訴求される。つまり，「自分で自分の声を聞く」一体性を確保するために，文字——法と制度——の力を最大限に利用したプラトン以降の〈永遠の形而上学〉の伝統と，それにのっとって集団的同一性を保持しようとする〈共同性の伝統〉とを補正するものとして，〈公共性の伝統〉が発掘されなければならなかったのである。

4　考察——現代社会論にとっての含意

以上，複雑な経路をたどって，リクールとアレントの立論の微妙な差異

をなぞりながら，両者を包括しうるような視点を探った。このような議論の複雑さは，結局のところ，あらゆる言葉の出来事の両義性に由来するものである。つまり，われわれが言葉をもって他者に語りかけるとき，この言葉の出来事は，一方で合意を求める「同化」の欲望を携えており，他方で評価にさらされ変更を迫られる「他化」の可能性に開かれているのである。言葉は，同化と他化のはざまで宙づりになる。言葉の痕跡とその総体たる制度も，同一の意味の担い手としての拘束性と，いかようにでも解釈されうる流動性とを同時に帯び，しかもそのどちらでもない。アレントはロゴス中心主義と結託したエクリチュールの暴力性――同化の側面――を嫌い，多数の声が多数の声として保持される公的領域の重要性を強調した。それに対し，リクールは，言葉の「はかなさ，不安定さ fragilité」を見据えながら，むしろそれを徹底させること，解釈的実践を通してエクリチュールの潜在的可能性――他化の側面――を展開させることを目指すであろう（Ricœur 1990b）。そして，それはアレントの活動が目指していたところでもあるとするだろう。

まとめるなら，アレントの「仕事」は同化の暴力性を含み，リクールの「作品」はその自律性と外在性ゆえに逆説的に他化の可能性に開かれる。アレントは，仕事の暴力性を乗り越えるために，多数性を保持する「活動」に訴えなければならなかったが，活動のはかなさ・不可逆性・予言不可能性の救済という難問を残した。リクールは，作品における同化と他化の両義性を最初から前提しているので，「行為」のテクスト性，作品性を指摘する際にも，その閉鎖性と開放性を一種の循環のうちに把捉しえたし，政治的行為におけるはかなさの質をむしろ積極的な可能性としてとらえることができた。

行為と物語と制度の理論

ここで便宜上，リクールの行為とアレントの活動を「アクション」とし，リクールの作品とアレントの仕事を「ワーク」として，アクションとワー

クと物語と制度の関係性をわたしなりに図式化しておこう。

まず，アクションは先行する物語によってすでに構造化されている（リクールの言う「先形象化」）。言い換えれば，アクションとは，経験の制作であり――というのも経験に帰結するのでなければ，それはそもそもアクションとして認知されえないのだから――経験の規則にのっとりながらも創発的に，自己にとっても他者にとっても新たな経験が生起するよう働きかけることである。それはあるシナリオにのっとりながらも，他者と住まう世界――それ自体ワークの所産である世界――というステージの上で，共同で即興的に物語を制作しつつ，いまだかつてなかったやり方で演じる（アクトする）ということである。誰もが唯一独自の存在であるような多数性という条件のもとで繰り広げられるアクションは，その唯一無二の人格，「誰」（リクールの言う「物語的自己同一性」）を開示する生ける物語である。さらに諸々のアクションによって生起する出来事の経験は記憶のなかに痕跡を残し，想起されるのを待つ。そこで，アクションの模倣たる物語というワークが制作される（リクールの言う「統合形象化」）。それは，痕跡の痕跡として，アクションの出来事の想起を助け，想起が起こるその都度，世界を指示し構築する（リクールの言う「再形象化」）。狭義の物語に限らず，アクションの所産（ワーク）一般，すなわち想起の機関として機能するものいっさいの沈殿したものが，制度である。

ともに何かをなし，仕事＝作品として残すこと，それが糧であれ，使用物であれ，振る舞いであれ，承認され評価され，それによって財として共有されること，そしてその共有が物語的形態をもった儀礼や神話によって確認されること，またこのようなもっとも広い意味における財の贈与交換，互酬，再配分が関係性を強化すること，以上の所作と作法の全体――経済的＝法的＝道徳的な制度――が人格をとおして伝えられ学ばれること。このような共同体の形態を，前近代的な，市場中心の経済より以前の「家政＝経済（エコノミー）」の理念型として措定しておこう（もちろん，前近代的なエコノミーにおいても市場そのものは存在するが，それは共同体の外側に慎重に配置され，

共同体内に持ち込まれないよう配慮されていた)。

公的領域と私的領域の転倒

アレントも指摘するように，古代ギリシアにおいてはとくに，このようなエコノミーは家族共同体という私的領域のなかで実現されるような秩序であった。そして，そこでの生きるための労働から自由な市民だけが，家族共同体の外の公的領域において，政治的活動にかかわることができたのである。やがて，〈工作人〉の公的領域たる交換市場が発達し，市場価値(ヴァリュー)が物そのものに内在する唯一独自の価値(ワース)を圧倒し，さらにそこで交換される物じたいが耐久物としての性格を失い消費されるだけのものになってゆく。この大量生産と大量消費の実現によって，生産と消費という生命の必然に関わるエコノミーは，疑似的な家族共同体である〈国＝家〉の規模にまで膨張する。かつては家という私的領域に閉ざされていたエコノミーが公的領域を埋め尽くし，言葉としても概念としても実定的制度としても近代的構成物である〈社会〉が，国家単位で成立する。逆説的に，公的領域での活動は，現代においてはむしろ家族のなかで実現されているのである。

アレントのこうした分析は，概念史的手法で近代〈社会〉の生成を明らかにしたものであり，社会理論にとって無視できない功績であろう。のみならず，〈公的領域〉と〈私的領域〉の転倒は，現代社会のさまざまな局面を的確に説明してくれるであろう。政治経済システムが生命の必然性に配慮するシステムとなり，生産と消費の終わりなきリズムを打ちながら躍動する有機体のなかで，われわれの唯一独自の存在が無に等しいものとなり，小さな家族のなかへ囲い込まれる。しかしながら，われわれの唯一独自性の承認が果たされるべき家族も，大規模なエコノミーの代行機関となっており，しかもその規模は公的領域を形成する場所としてはあまりにも小さすぎる。生産と消費の場であり，共同の仕事を通じて何かが伝えられ学ばれるような家族共同体は，近代においては家庭・職場・学校へと分化・分裂しており，その各領域で巨大な労働機械の部品にふさわしい画一

化した個人が再生産されている。

物語ることへの期待

その代案として，〝労働から自己実現としての仕事へ〟という転換[4]，家族において誤承認か承認不足のまま放置されてきたアイデンティティの，物語を通じての再編成[5]，脱学校化あるいは〝教育から学習へ〟という転換（Illichi 1970, Lave & Wenger 1991）が，すでに提出されている。おのおのの領域において，生の全体性を縫合する試み，人格の独自の尊厳を回復する試みがなされており，物語＝仕事へと期待が寄せられているのである。いずれも，消費としての遊びの領域に囲い込まれる危険性を意識しながら，活動的生を通じて真の遊戯性と演技性を発揮してゆかねばならない[6]。

ここでも，アレントの目指しているところを単純に公的領域の復権であると考え，いっさいの共同性の廃棄に向かおうとするのは，明快だが誤謬である。あらゆる言葉の出来事が同化と他化のはざまで揺れ動いていたように，あらゆる人間集団は，多数性の保持と一体性の実現とのあいだで揺れ動いているのであり，だからこそ，公的領域と私的領域の配置替えも起こりえたのである。現代社会の困難は，かつての公的領域に共同性の実質が移植されたために，共同体自体の脱埋め込みと拡散が起こり，意識的には共同体の喪失が経験されているという点にも存する。この共同性の復権を，共同体主義は絶えず目指そうとするであろう。共同体の肥大化は，共同性の立場にとっては，単なる勝利ではなく，共同体の変質と喪失として映っているのである。住まうべき家（共同体）もなければ，人格の卓越さの相互承認（公的領域）もない。必要なのは適切な再埋め込みであり，再編された共同世界の舞台で多声を響かせ調和させようとする倫理的努力なのである[7]。

注

(1)　本稿は，第71回日本社会学会大会（1998年11月22日，関西学院大学）

における発表をもとにしたものである。

(2) これは歴史や制度の実体視という誤謬にはならない。それが，行為主体の手を離れて自律化するかぎりにおいて，行為主体の目から見れば「実体」化するということなのである。

(3) J・デリダ (Derrida 1967)，W・J・オング (Ong 1982) 参照。ただしオングの無理解なデリダ批判は無視するべきである。なお，イデア論と制作の関係の指摘はアレントによっている。

(4) 杉村 (1997) は，「自己実現としての仕事」論をコンパクトにまとめて紹介している。杉村自身の見解は，「自己実現としての仕事」という理念を仕事倫理たりえない快楽主義として批判し，「良い仕事」の倫理を立ち上げようとしているが，彼の「自己実現」概念は狭すぎる。また，千石 (1997) は，現代日本の若者の意識の調査に基づいて，ここで言う自己実現的な仕事観（この言葉自体は使っていないが）が芽生えつつあるとしている。

(5) 最近のトラウマ論のみならずフロイトの精神分析のころから問われている問題であるが，参考文献は多すぎるので記さない。

(6) 今村 (1988) は，アレントの議論を受けつつも，労働の地位向上そのものには一定の評価を下し，重要なのは，遊戯性と演技性とを含んだ「仕事」へと労働の質を転換させることだとしている。

(7) 「脱埋め込み」，「再埋め込み」といった概念については，A・ギデンズ (Giddens 1991) を参照せよ。

参考文献

Arendt, Hannah. 1958. *The Human Condition* (Chicago: University of Chicago Press). 志水速雄訳『人間の条件』(筑摩書房，1994 年)。

Derrida, Jacques. 1967. *De la grammatologie* (Les éditions de Minuit). 足立訳『根源のかなたに――グラマトロジーについて』(現代思潮社，1972 年)。

Giddens, Anthony. 1976. *New Rules of Sociological Method : A Positive Critique of Interpretative Sociologies* (London: Hutchinson). 松尾・藤井・小幡訳『社会学の新しい方法基準――理解社会学の共感的批判』(而立書房，1987)。

Giddens, Anthony. 1991. *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age* (Stanford UP).

Illich, Ivan D. 1970. *Deschooling Society* (Harper & Row). 東・小澤訳『脱学校の社会』(東京創元社，1977 年)。

Lave, Jean & Wenger, Etienne. 1991. *Situated Learning : Legitimate Peripheral Participation* (Cambridge UP). 佐伯訳『状況に埋め込まれた学習

——正統的周辺参加』(産業図書, 1993年)。

Ong, Walter J. 1982. *Orality and Literacy: The Technologizing of the World* (Routledge, 1988). 桜井・林・糟谷訳『声の文化と文字の文化』(藤原書店, 1991年)。

Ricœur, Paul. 1971. 《Le modéle du texte: l'action sensée considérée comme un texte》, in *Du texte à l'action : Essais d'herméneutique II* (Paris : Éditions du Seuil, 1986).

Ricœur, Paul. 1976. 《L'imagination dans le discours et dans l'action》, in *Du texte à l'action: Essais d'herméneutique II* (Paris: *Éditions du Seuil, 1986*).

Ricœur, Paul. 1983. 《Préface à *Condition de l'homme moderne*》, in *Lecture I* (Paris: Éditions du Seuil, 1991).

Ricœur, Paul. 1983-5. *Temps et récit* (Paris: Éditions du Seuil). 久米訳『時間と物語 III』(新曜社, 1987-90年)。

Ricoeur, Paul. 1986. "Life: A Story in Search of a Narrator," in Doeser, M. C. and Kraay, J. N. (eds.) *Facts and Values: Philosophical and Reflections from Western and Non-Western Perspectives* (Martinus Nijhoff Publishers), pp. 121-132. (tr. by J. N. Kraay and A. J. Scholten). 仏文テクストは入手不可。

Ricœur, Paul. 1990a. *Soi-même comme un autre* (Paris: Éditions du Seuil). 久米訳『他者のような自己自身』(法政大学出版局, 1996年)。

Ricœur, Paul. 1990b. 《Langage politique et rhétorique》, in *Lecture I* (Paris: Éditions du Seuil, 1991).

今村仁司。1988年。『仕事』(弘文堂)。

杉村芳美。1997年。『「良い仕事」の思想——新しい仕事倫理のために』(中央公論社)。

千石保。1997年。『「モラル」の復権——情報消費社会の若者たち』(サイマル出版会)。